

リポート
Report大磯町郷土資料館だより
2025・7・14

45

目次

- | | | |
|----|---|--------|
| 2 | 照ヶ崎海岸の砂の増減について | 村田 聡美 |
| 9 | ワークショップ「甲冑を着てみよう！
～日本の甲冑のお話と模擬甲冑の試着～」の報告 | 長谷川 明香 |
| 10 | 展示報告：企画展「川端誠さん絵本原画と民具の世界」 | 真保 元 |



照ヶ崎海岸の岩場 2023年9月23日

今回の「資料館だより」は、3本の原稿が掲載されています。1本目の「照ヶ崎海岸の砂の増減」では、照ヶ崎海岸の砂が増減していることを、村田学芸員が定点観測により明らかにしています。同じ場所から繰り返し観測していく、一見地道な調査の積み重ねが地域にとっての大事な記録につながっていきます。

そのほか、令和6年（2024）10月に行われた甲冑のワークショップや、令和6年夏季の企画展の報告が掲載されています。16ページにわたる圧巻のボリュームです。ぜひ、ご覧ください。

照ヶ崎海岸の砂の増減について

村田聡美（当館学芸員）

はじめに

みなさんは普段、海に行くことはあるでしょうか。海に行ったときに足元に広がる砂浜に目を向けることはありますか。何も変わりのないように見える砂浜ですが、海岸では砂が絶えず動き続け、増えたり、減ったりを繰り返しています。大磯町では北浜海岸、こゆるぎの浜には広い砂浜が広がっています。

今回は砂という視点から、大磯での唯一の岩場である照ヶ崎において、年間を通してどのように変化しているのか記録しました。

照ヶ崎海岸の砂の増減に関する記録

照ヶ崎海岸の岩場は磯の生き物を観察できる水深の浅いタイドプールが3つあります。この中でも向かって左手手前の水深のやや深いタイドプールを①、左手奥の水深の浅いタイドプールを②、右手の水深の浅いタイドプールを③として、この3つのタイドプール（写真1）の砂の動きを中心に、照ヶ崎海岸の岩場での砂（礫も含む）の増減について⁽¹⁾、2023年12月から2024年11月の様子を記録しました。

日付のあとに記載されている矢印は、前回の調査と比べ、砂が増加した場合「↑」、変化がなかった場合「→」、減少した場合「↓」で示しています。

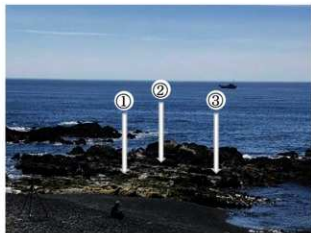


写真1 照ヶ崎海岸の3つのタイドプール（2023年9月）



写真2 岩場（2023年12月30日）

2023年の秋から徐々に砂の増加が見られる。①～③のタイドプールは砂で埋まっている。

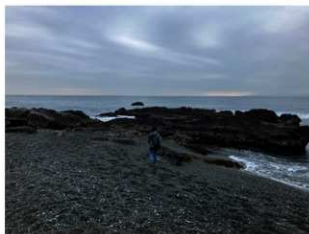


写真3 岩場（2024年2月17日「↑」）

完全に①～③のタイドプールが砂に埋まり、岩場全体の形もわからない状態。



写真4 タイドプール① (2024年3月13日「↓」)
前日12日は強い風を伴う雨が降った。砂が減少し、3つの
タイドプールを確認することができる (写真4、5、6)。



写真5 タイドプール② (2024年3月13日「↓」)



写真6 タイドプール③ (2024年3月13日「↓」)



写真7 タイドプール①② (2024年5月14日「↑」)
前回よりも砂が増加しており、すべての岩場に砂が入ってい
る。①は砂が溜まり、水深は10cm程度。②は底に砂が溜ま
り、水深は10cm程度。③は埋まり、砂で盛り上がっている
(写真7、8)。



写真8 タイドプール③ (2024年5月14日「↑」)



写真9 タイドプール①② (2024年5月21日「↑」)
タイドプール①②③が砂で完全に埋まる (写真9、10、11)。



写真10 タイドプール③ (2024年5月21日「↑」)



写真13 タイドプール② (2024年7月2日「↓」)



写真11 全体 (2024年5月21日「↑」)



写真14 全体 (2024年7月2日「↓」)



写真12 タイドプール① (2024年7月2日「↓」)

全体的に砂が減少し、タイドプールには海水が溜まっている (写真12、13、14)。



写真15 タイドプール①② (2024年8月23日「↓」)

砂は減少し、タイドプール①の底にわずかにある程度。タイドプール②③にはほぼ無し (写真15、16、17)。



写真16 タイドプール③ (2024年8月23日「↓」)



写真19 タイドプール① (2024年9月29日「↑」)

③に前回よりやや少量の砂の堆積が見られたが、全体的には大きな変化は見られず (写真19、20、21、22)。



写真17 全体 (2024年8月23日「↓」)



写真20 タイドプール② (2024年9月29日「↑」)



写真18 タイドプール③ (2024年9月3日「→」)

8月末に台風10号が襲来したが、照ヶ崎の砂の量には変化は見られず。



写真21 タイドプール③ (2024年9月29日「↑」)



写真22 全体 (2024年9月29日「↑」)



写真23 タイドプール① (2024年11月14日「↑」)

③に前回よりやや砂の増加が見られたが、全体的には大きな変化は見られず(写真23、24)。



写真24 タイドプール③ (2024年11月14日「↑」)

天候の荒れた翌日に砂の増減が見られる傾向があること、波は風の吹く方向へ進む特性があることから、風向と砂の増減の関係について、4日間の調査日において気象庁のデータと比較しました。また、西向き、東向きの風が増減にかかわる可能性を考え、西向きの要素のある、西・南西・南南西・北西などを西の風、東向きの要素のある東・北東・東北東・北北東などを東の風として、割合を出しました。

前回調査日2月17日より減少が見られた3月13日は前日に47mmの降雨とともに最大瞬間風速16.8m/sの北の風が吹いています。この期間中に西の風の日は13.6%、東の風の日は36.3%でした。東の風により、東向きの波が起こり、砂が小田原方向に移動したと考えられます。

短期間(5月14日～20日)において増加が見られた5月21日は16・17日で最大風速10m/s以上の南南西の風が吹いています。この期間中に西の風の日は71.4%(5日間)、東の風の日は28.5%(2日間)でした。西の風により砂が岩場に吹き上げられたことが考えられます。

大きく減少した7月2日は前回調査日から今回調査日の間(5月21日～7月1日)に、西の風の日は58.5%、東の風の日は12.2%でした。最大風速が10m/sを越えた日は5日間、すべて南南西の風が吹いていました。南西向きの風が多いにも関わらず砂が減少しました。

変化が見られなかった9月3日は直前の8月31日に最大風速13.2m/sを超える台風10号(最多方向:南の風)が通過しています。砂の堆積量は減少したまま、大きな変化はありませんでした。風向のみでは減少の要因はわかりませんが、風向と風力以外の要素も関わり、9月3日は砂が減少する条件だったため、変化がないように見えたことが考えられます。

これらのことより、天候が荒れた翌日などに砂の増減が見られるなど、気象条件が何らかの形で影響しているとは思われますが、そこに関わる要素は風向・風力だけではなく、多くの要素が関わり合っていることが考えられます。

砂の移動について

照ヶ崎海岸の砂はそこに含まれる砂の組成から、酒匂川から流れ出した砂が西から東に向かって、沿岸流に乗って運ばれていることがわかっています。相模川から流れ出した小仏層群の礫は平塚側でのみ見られています。また、礫の大きさからも酒匂川から流れ出した礫が東に向かうにつれ、そのサイズが小さくなることから漂砂は西から東に移動していることがわかります。酒匂川から流れ出る礫は緑から青味のある丹沢の凝灰岩類・火山岩類・変成岩類、ごま塩状のトール岩類、富士溶岩類などです(森 2005)。

砂の減少要因

砂の減少について調査記録があるため、以下に記します。2007 年 9 月 6 日、台風 9 号上陸時は西湘海岸では高波が東寄りから打ち寄せたため西向きの沿岸漂砂が発達し、森戸川沖の海底谷を経て大量の土砂が深海へ流出し急激な侵食が起きました。西湘海岸では波の入射方向の変化とともに沿岸流砂の方向が反転する特徴がありますが、明らかにされていません。

また、照ヶ崎海岸における 2014～2016 年の調査では東側は固定境界のため、その西端境界を西向きの沿岸漂砂が通過して侵食が起きたと考えられています。この時期の照ヶ崎海岸では年間 1.9 m^3 の土砂量が減少しています(宇多ほか 2018)。

2019 年の 10 月の台風 19 号通過後には照ヶ崎海岸の砂が海中に流出し、岩場が大きく露出しています。また、海岸背面のコンクリート部分が砂の減少により、広く露出しています(写真 25、26、27)。

砂は一定量を保つ

Sunamura が提案している砂の移動に関する指標としては(Sunamura 1989)、砂質海岸や砂礫海岸では暴浪波の作用により土砂が前浜から沖側に運ばれても⁽²⁾、海中に砂の堆積したバーを作り、その後静穏波の作用により、土砂が岸側に運ばれて、前浜が復元され、元の形状にもどります。しかし、暴浪波の影響でかなり深いところまで運ばれると、その土砂は静穏波に戻った後も岸側に戻ることはできないと考えられます(山本 2003)。

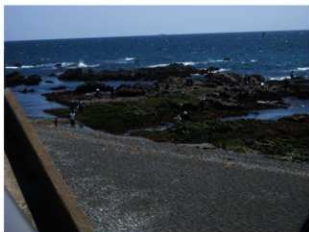


写真 25 2020 年 5 月



写真 26 2020 年 3 月 13 日



写真 27 2024 年 12 月 20 日

結論

砂浜では日々、砂が動いており、こゆるぎの浜から、照ヶ崎海岸にかけては西から東に砂が移動しています。また、砂浜は砂の量を一定量に保とうとい



写真28 タイドプールの生き物（ナベカ）



写真29 タイドプールの生き物（マツバガニ）

う働きがありますが、照ヶ崎海岸は1年の中でも砂が増えたり、減ったりを繰り返しています。その要因の一つは気象条件で、沿岸流の向きが台風や気象などで変わることによって減少することがありますが、その要因は明らかにされていません。また、砂の季節変化は夏に減少し、冬には増加する傾向があります。

今年度タイドプールでは甲殻類のイワガニ・ヒライソガニ・ホンヤドカリ・オウギガニなど、魚類ではカエルウオ・ナベカ・アゴハゼなど、その他ヨロイソギンチャク、クロイソカイメン、多くの貝の仲間などの生き物が見られました(写真28、29)。

反対にタイドプール③で見られていたクモガニの仲間が今年は見られませんでした(写真30)。2024年は砂が溜まっている期間が長く、海藻のビリヒバの生育が見られなかったことがかかわっているかもしれません。

自然は数時間から1日などの短期間で変化することもあれば、長い年月をかけて気が付かないほど少しずつ変化しているものもあります。ぜひ皆さんも自然に目を向けてみてください。今後も継続して、大磯の自然について調べつつ、みなさんに自然情報をお伝えしていきたいと思います。

注

- (1) 岩石が壊されて粒になったもので2mmより大きいものを礫、小さいものを砂という。
- (2) 波打ち際の、波が砕けるところから満潮時に波が来るところまでを指す。



写真30 タイドプールの生き物
(ビリヒバを背中につけたイソクズガニ)

参考文献

- 宇多高明・五十嵐竜行・大谷靖郎・五味久昭・立石賢吾・繁原俊弘(2018)『西湘海岸における2014～2016年の海浜地形変化』土木学会論文集B3(海洋開発)Vol.74, No.1, pp1_677-1_682
- 森慎一(2005)『大地をめぐる石の旅—海から山・そして海へ—』平塚市博物館
- 山本幸次(2003)『漂砂系の概念と海浜過程に関わる研究課題』土木技術資料45・7
- Sunamura, T.: Sandy beach geomorphology elucidated by laboratory modeling, V.C.Lakhan and A.S.Trenhaile(editors), *Applications in Coastal Modeling*, Elsevier, Amsterdam, pp.159-213, 1989.

ワークショップ「甲冑を着てみよう！～日本の甲冑のお話と模擬甲冑の試着～」の報告

長谷川 明香（当館学芸員）

はじめに

令和 6 年度の大磯町郷土資料館の新たな取り組みとして、ワークショップ「甲冑を着てみよう！～日本の甲冑のお話と模擬甲冑の試着～」を開催しました。

ここでは、本ワークショップの概要と開催模様についてご紹介します。

ワークショップの趣旨と概要

本ワークショップを開催した経緯は、当館に所蔵されている伊藤博文の甲冑の存在です。この甲冑は伊藤から大磯小学校に寄付されたもので、元々校長室に置かれていました。その後、当館に移管を受けたもので、現在はエントランスに展示しております。

来館される方のなかには、この甲冑に興味を持たれ、写真撮影をする方も多く、甲冑への興味関心の高さを日々感じておりました。そのような状況を鑑み、甲冑への理解を深めてもらうべく、このようなワークショップを開催することにしました。

ワークショップの内容は、甲冑の仕組みに関する講演と模擬甲冑の試着でした。事前予約制で 19 名の方にご参加いただきました。小学生の子どもから 70 代の大人まで幅広い世代にお集まりいただき、様々な方が甲冑に興味を持っていることを感じました。

甲冑の仕組みに関する講演と模擬甲冑の試着

ワークショップの前半では、甲冑の仕組みに関する講演を行いました。講演は神奈川県立歴史博物館の学芸員である梯弘人氏に賜り、甲冑の大まかな分類と特徴、用途に合わせた制作方法、使われている素材などを分かりやすくご説明いただきました。また、当館所蔵の伊藤博文の甲冑を分析された結果もご紹介いただき、当館としても非常に有益なお話でした。

後半では、模擬甲冑の試着ということで、手づくり甲冑をご自身で製作されている荻野龍子氏と高垣元氏の協力を得て、模擬甲冑の試着を行いました。甲冑は手作りとは思えないほど精巧で、重みもあり、参加者の皆



講演の様子



模擬甲冑



試着の様子

さまに非常に喜んでいただきました。

今回、初の試みであった当ワークショップは無事盛況に終わり、改めて甲冑への興味関心の高さを認識しました。今後も来館者の皆さまに喜んでいただける企画を考えて参ります。

はじめに

本稿は企画展示「川端誠さん絵本原画と民具の世界」の展示報告である。展示概要を整理したうえで、展示のねらいについて示し、所感を述べる。

1. 展示概要

展示名称は「川端誠さん絵本原画と民具の世界」であり、開催期間は2024年7月13日（土）から31日（水）の18日間で、会場は郷土資料館の企画展示室および大磯町立図書館である（図1）。



図1 企画展示室全体

本展は、図書館をサポートする任意団体である大きなうち、大磯町郷土資料館、大磯町立図書館の3者が共催で行った。図書館では絵本原画と川端誠氏個人が所有している道具や、制作風景などの展示が行われた。本稿では、郷土資料館での展示を主題として扱う。

今回は絵本作家の川端誠氏の絵本原画と、絵本に登場あるいは絵本の内容にリンクした民具を展示した⁽¹⁾。展示趣旨の一部を参考までに引用する。

企画展「川端誠さんと民具の世界」を開催します。川端誠さんが2002年に出版した『お化けの海水浴』（BL出版）では、様々なお化けが海へ行き、海水浴や素潜りをして海を楽しむ様

子が描かれています。

一方、大磯町は海水浴発祥の地ともいわれおり、明治18年に海水浴がはじまって以降、多くの人々が大磯海水浴場を訪れました。この海水浴場設置により、大磯は別荘の街として発展していくこととなります。

また、海がそばにひかえる町であることから、海にまつわる妖怪の伝承もあり、特に海沿いは海での漁を生業とする漁師たちが暮らす漁師町でもあります。海水浴と漁業、どちらも大磯の海をとらえるうえでは欠かせない存在だといえます。

本展では、川端誠さんの『お化けの海水浴』の原画と、それにちなんだ大磯の海水浴の歴史や道具、海に関する妖怪の伝承や、漁労道具を展示することにより、大磯の海の世界をご紹介します。（後略）

『お化けの海水浴』の原画および原画のモチーフとなった川端誠氏所蔵の民具を展示したほか（図2）、資料展示の構成は、3つのテーマを設定した。参考までに、展示資料の一覧を提示する（表1）。

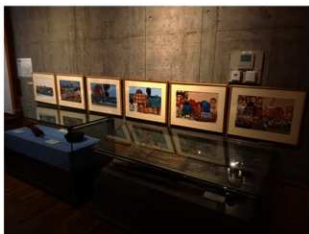


図2 絵本原画と川端誠氏所蔵の民具の展示

1つ目が「大磯と海水浴」である（図3）。絵本の中ではお化けが海水浴を行っている様子が描かれて



図3 大磯と海水浴の展示



図5 大磯と漁業の展示

いる。大磯は海水浴場発祥の地といわれており、大磯の海水浴の歴史的側面を紹介した展示を行った。

2つ目が「大磯とお化け」である(図4)。絵本の中にはお化けが数多く登場するが、大磯にも多くの妖怪の伝承が存在する。一つ目小僧など、絵本にも登場する妖怪の伝承を紹介した。あわせてカゴを展示し、年中行事の事八日や、左義長を紹介した。



図4 大磯とお化けの展示

3つ目が「大磯と漁業」である(図5)。絵本ではお化けが魚を獲る様子が描かれている。大磯は海沿いの街で、かつては漁業が盛んであった。当館でも漁労道具を多数所蔵しており、その中からツキンボ漁のモリや、曳き釣り漁の潜航板などを展示した。そのほか、マイワイや大漁旗なども展示を行った。

関連企画としては、7月27日(土)13時~15時に川端誠氏を招聘し、トークイベントを行った。2時間のうち、前半の1時間半程度で川端誠氏が絵

本制作の裏側を紹介するトークショーを、後半の30分程度で筆者が展示解説を実施した⁽²⁾。

2. 展示のねらい

本企画展の展示時期は夏季であり、海水浴に行くなど海に触れる時期でもある。本企画展は「海水浴」「妖怪」「漁業」を通じて、複眼的に大磯の海をとらえるものであり、本企画展を通することで人文的側面から把握できるようつとめた。

当館の民俗の常設展示は「祭礼」と「信仰」が中心であり、衣食住や生業などの日常生活が展示されていないことが課題であった。本企画展は、生業の中でも漁業に焦点をあてることで、前述の課題の克服を試みた。

ちなみに、最後に民俗の展示が行われたのは2018年開催の「ちょっと昔の暮らしと道具」(会期:2018年2月3日~3月31日)であり、民俗を主テーマとした展示は約5年ぶりである。この間、民俗の学芸員が不在だったため、民俗の展示が行われていなかった。当館は収蔵庫1から収蔵庫3、特別収蔵庫、東蔵および外部のプレハブ収蔵庫など、いくつかの収蔵庫があり、その中でも民俗資料が多くスペースを占有している。しかし、企画展などの機会を設けないと、死蔵されてしまう懸念がある。民俗資料をテーマとした展示を行うことで、少しでも館に収蔵されている資料を公開できればとも考えていた。

表1 展示資料一覧

『お化けの海水浴』原画					
番号	資料名	所蔵 (敬称略)	資料番号	点数	備考
1	『お化けの海水浴』原画	川端誠	—	20	
資料展示					
Ⅰ 大磯と海水浴					
1	松本順の写真	当館	1990-0203	1	写真パネル
2	海水浴法概説	当館	2012-1204	1	明治19(1886)年 写真パネル
3	大磯の海水浴	当館	1991-0332	1	明治33(1900)年
4	大磯海水浴浜辺景禰龍館 繁栄之図	当館	2015-0701	1	明治24(1891)年
5	海水浴場	当館	1988-1218	3	明治中期～後期
6	(大磯名勝) 照ヶ崎海水浴場	当館	1988-1218	2	昭和6年～8年
7	海水着姿の女性たち	当館	2006-0601	1	明治中期～後期 写真パネル
8	じいやとお馴染み	当館	1988-1218	1	明治中期～後期 写真パネル
9	イタゴ	当館	2003-0807	1	
Ⅱ 大磯とお化け					
1	一つ目小僧 (一番息子)	—	—		文字パネル
2	一番息子	—	—		文字パネル
3	大磯の左義長	当館	—	1	2018年撮影 写真パネル
4	カゴ	当館	2000-0434-0002-1	1	
5	セーマンドーマン	—	—		文字パネル
6	船幽霊	—	—		文字パネル
7	オオダコ(タコ足の八本目)	—	—		文字パネル
8	ウミボウズ(盆の16日に船 を出さないわけ)	—	—		文字パネル
Ⅲ 大磯と漁業					
1	タコをとらないわけ	—	—		文字パネル
2	たも網	当館	1989-0701-0013-1	1	

3	モリ	当館	1995-1005-0016-1	1	
4	ハイカラの道具	当館	1986-0203-0002	1	
5	曳き釣りの道具	当館	1992-0503-0006 1992-0503-0004	2	
6	イカツノ	当館	2021-0102	2	
7	イナダ用のツノ	当館	1992-0503-0011	2	
8	タコツボ	当館	1990-0401-0001-2 1986-0703-0008-2	2	
9	ビク	当館	1995-1005-0004 1986-0703-0004-1	1	
10	エビ用のイケス	当館	1989-0701-0002-2	1	
11	チゲ	当館	2001-0501-0013-1	1	
12	ドロボウキ	当館	1986-0106-0001	2	
13	アカトリ	当館	1983-1002-0019 1985-1208-0004	2	
14	ウキ	当館	1984-1107-0002-1 1984-1107-0002-2 1986-0203-0003	3	
15	大磯港のブリの水揚げ	当館	mb10-4-4	1	昭和27年松原勇吉氏撮影 写真パネル
16	大磯港のブリの水揚げ	当館	mb10-4-3	1	昭和27年松原勇吉氏撮影 写真パネル
17	大磯港のブリの水揚げ	当館	mb14-9-4_1	1	写真パネル
18	マイワイ	当館	1986-0802 1998-0502	1	うち一点(1998-0502)は ワタイレ
19	大漁旗	当館	2024-0603-0001	1	
20	イキョ	当館	不明	1	
21	大磯の定置網	当館	不明	1	写真パネル
22	はえ縄漁の準備 (大磯漁港にて)	当館	mb14-9-15_1	1	松原勇吉氏撮影 写真パネル
モチーフになった民具					
1	ナベ	川端誠	—	1	
2	ショイコ	当館	2001-0404-0019	1	
3	唐傘	川端誠	—	1	
資料展示合計				46	

表2 企画展そのものにかかわる感想（抜粋）

内容	おもしろい	ややおもしろい	ふつう	ややつまらない	つまらない
	18	3	1	0	0
見やすさ	見やすい	やや見やすい	ふつう	やや見づらい	見づらい
	19	3	0	0	0
解説	わかりやすい	ややわかりやすい	ふつう	やや難しい	難しい
	14	8	1	0	0
全体	満足	やや満足	ふつう	やや物足りない	物足りない
	19	3	0	0	0

3. 所感

今回の展示は18日間と短期間であったが、1049人の来館者があった。北水慶一によれば、当館は夏季に来館者が伸び悩む傾向にあるため、夏季に行われる展示は来館者が伸びにくい〔北水 2009：31〕。そのことを踏まえれば、十分な来館者数といえよう。

アンケート結果についても触れておく。今回は企画展自体とトークショーでアンケートを行った。企画展自体に関するアンケートは期間中に24枚の回答があった。アンケートの個別での回答数の表示は紙幅の都合上 2025 年刊行予定の『大磯町郷土資料館年報』37号に譲るが、感想に関して言えば24枚の回答中、内容・見やすさ・解説・全体いずれの項目も五段階中で14～19個が最大評価であった（表2）。解説のみ、わかりやすいが14となっているが、ややわかりやすいが8となっている。本展示はパネルの文字数があまり無かったことにも起因するだろうが、概ね高評価を得られたのではないだろうか。

アンケートには自由意見欄も設けている。12件の意見が寄せられており、簡単に紹介すれば、「絵がキレイで色使いが美しく、すてきだと思いました。」

（60代、横浜市）といった絵本原画に関する意見や、「タコ漁具など、民具と伝承の関係が分かりやすく良かったです。今でも8月16日に船は出さないのでしょくか。」（70代以上、平塚市）といった民具と伝承の有機性を評価する意見がみられた。一方で、「もう少しボリュームを加えて期間を長くした展示でもよいのではと思いました。絵本と民具のコラボは親しみやすく分かりやすかったです。楽しい展示あ

表3 トークショーのアンケート結果（抜粋）

内容	
おもしろい	17
ややおもしろい	1
ふつう	0
ややつまらない	0
つまらない	0
無回答	1

りがとうございました。」（40代、藤沢市）という意見もあり、後述する筆者の課題点を端的に表した意見も寄せられている。

トークショーに関するアンケート結果もみておきたい。トークショーにかかわるアンケートは39名の参加者中19枚の回答があった。企画展本体と同様、感想欄だけに触れれば（表3）、内容がおもしろいに17、解説が16となっている。

トークショーの自由意見も、「原画もステキでしたし、郷土資料館の道具もいろいろ見れてよかったです。海のことも生活のことも、大磯のことがよくわかりました。子どもにも見せたかった。」（50代、神奈川県内）、「先生の講演会をたいへん楽しく聴かせていただきました。ああ来てよかったです。学芸員さんの解説もとても興味深く、講演会を連動してのこの企画は理解も深まるのですばらしいと思いました。」（50代、平塚市）などの好意的な意見が数多く寄せられた。川端誠氏の軽快なトークによって絵本



図6 講演中の川端誠氏

制作の裏側を知ることができたため、高評価を得たといえよう(図6)。

課題点としては、主に①順路、②展示内容の深度の2点がある。①の順路は、資料展示は企画展示室内を時計回りで回よう案内しているが、絵本原画の並びが反時計回りのため、途中で順路が入れ替わってしまう。そのため、順路がわかりづかったという声もあったが、これには事情がある。当館企画展示室には展示ケースAと展示ケースBの2つがある。いずれも奥行きがあまり無く、展示ケースAが50.5cm、展示ケースBが75.9cmのため、展示ケースAに漁具を展示することが困難であった。この事情を鑑みれば、展示構成上順路が時計回りになってしまうのはやむを得ない事情であった。

②の展示内容の深度は、筆者個人の力量に由来するものであり、筆者が個人的に感じていたことであった。漁業については、道具を散発的に展示するに過ぎず、パネルの内容もやや粗いものがあった。筆者が当館に着任して3か月前後で行った展示であることを踏まえても、今一度反省の余地がある。

拙稿でも触れたが[真保 2025]、展示を通して学ぶことは多い。例えば、本展示を通して収蔵されている漁具をある程度把握することができた。前述のように、当館では大磯を中心とする、相模湾の網漁や釣漁、突漁などの漁具が数多く収蔵されている。収蔵庫1および東蔵の一部は漁具が占めており、これらの把握をする意義は大きい。

展示期間終了後には、本展示をふまえた常設展示の展示替えを行った。例えば、廻廊部分および中庭



図7 新設した大磯と漁業のコーナー



図8 新設した大磯と漁業のコーナー

にはハコブネが展示されていたが、ハコブネに本展示で展示したチゲなどの漁具を展示し、漁業のコーナーを常設展示として新たに設けることとした(図7、図8)。常設展示室内も、「海に願う祭り・大地に託す祭り」の部分に大磯の左義長(小正月行事)とのかかわりあいでもカゴを、「祈りのかたち」の部分でタコツボを展示した。

常設展示の船形の台座がある箇所は、2016年のリニューアル以前は「民話のオブジェ」コーナーがあり、高麗寺の観音漂着伝説が紹介されていた。リニューアル後はコーナー自体が無くなり、金色のタコのオブジェが置いてあるのみであった。「なぜ金色のタコがあるのか」と来館者に聞かれたこともあり、前述の漂着伝説を回答したこともある。今回、タコツボと漂着伝説の話を表示してオブジェとあわせてとらえることで、オブジェやタコツボ単体では表現

できなかった、漂着伝説との有機的な結びつきを行うことができた(図9)。

むすびに

本稿では、雑多ではあるが展示報告を行った。絵本と民具を掛け合わせる試みは、これまで来館しなかった層を取り込む、あるいは民具の視覚表現など⁽³⁾、有機的な連関を育む土壤に成り得る。今回の企画展の民具の展示パートは筆者の力不足により素描に留まった感があるが、民具と絵本の融合は改めて検討していくべきトピックである。

現在の大磯の漁業は、『大磯町史 8 別編民俗』[大磯町編 2003]から約20年が経過していることもあり、大きく変容していることが想定される。当館に収蔵されている漁具は、「ちょっと昔」に使われていたものが数多くみられる⁽⁴⁾。現在での大磯の漁業の状況を詳しく調査し、より一層の深度を担保した漁業の企画展を行うことを今後の展望としたい。

注

- (1) 筆者は見学することができなかったが、絵本と民具を展示としてかけあわせた試みは、兵庫県赤穂市の赤穂市立民俗資料館が2017年に「絵本の中の民具たち」展として行っている。
- (2) なお、本展示は1章「海水浴と大磯」を長谷川明香(当館学芸員)が、2章「大磯とお化け」および3章「大磯と漁業」を筆者が担当した。
- (3) 民具の展示によるある感想として、写真や動画が無いと民具を使っている様子がわかりづらいというものがある。絵本などは一種の視覚資料として用いることもできよう。
- (4) 例えば、船を洗うドロボウキはデッキブラシに置き換わっている。船内に溜まったアカ(海水)をくみ取るためのアカトリは、船体の素材がPRC(強化プラスチック)に変わったことで、そもそも使用しなくなった(いずれも2024年7月に南下町在住の漁師より聞き取り)。



図9 タコツボとタコのオブジェ

参考文献

- 大磯町編 2003『大磯町史 8 別編民俗』大磯町
北水慶一 2009「入館者数の博物館業務評価—指標としての有効性(大磯町郷土資料館の実所から)」『年報』平成19年度
真保元 2025「大磯町郷土資料館春季企画展「大磯のひな人形」を開催して—展示紹介にかえて—」『現在学研究』15

Report —大磯町郷土資料館だより— No. 45
令和7(2025)年7月14日発行
編集・発行 大磯町郷土資料館
〒255-0005 神奈川県中郡大磯町西小磯 446-1
TEL. 0463(61)4700/FAX. 0463(61)4660